

《症例報告》

尿沈渣で異型細胞を認めた悪性黒色腫の一症例

弘内 岳

要旨：悪性黒色腫はメラノサイトを起源とする悪性腫瘍であり，メラニン細胞の存在しない尿路に発生することは稀である．また，本邦では悪性黒色腫が尿路に転移することも比較的稀であると考えられる．悪性黒色腫および悪性黒色腫のリンパ節転移の既往のある患者の黒色尿中に黒色顆粒を有する異型細胞が認められ，悪性黒色腫の尿路への転移と判断された．黒色尿，黒色顆粒を有する異型細胞の存在は診断に極めて有用であった．

キーワード：悪性黒色腫 黒色尿 異型細胞

【はじめに】

悪性黒色腫はメラノサイトを起源とする悪性腫瘍であり，メラニン細胞の存在しない尿路に発生することは稀である．また，本邦では悪性黒色腫が尿路に転移することも比較的稀であると考えられる．

今回我々は肉眼的に黒色尿を呈した尿沈渣中に悪性黒色腫を推定する細胞を認めた症例を経験したので報告する．

【症例】

60歳代後半，男性．

既往歴は1993年5月，右頬部黒色斑に対し切除植皮手術が施行され，Lentigo maligna melanomaと診断された．2002年までフォローされたが転移，再発なく終診となった．2006年7月，前立腺癌の診断にて前立腺全摘術が施行された．2010年6月，右頸部の黒色小腫瘤を訴え来院，当院形成外科にて摘出術が施行されMalignant melanomaと診断された．同年7月，PET-CTにて転移・他の悪性腫瘍を疑う異常集積は認められなかった．2011年7月，フォローのPET-CTにて右頸部腫瘤を指摘され（図1），右頸部リンパ節摘出が施行され，Metastasis of malignant melanomaと診断された（図2）．2011年8月に胸腹部CTで肺および肝臓に瀰漫性陰影が指摘された．2011年12月，前立腺癌のフォローのため尿検査が施行された．

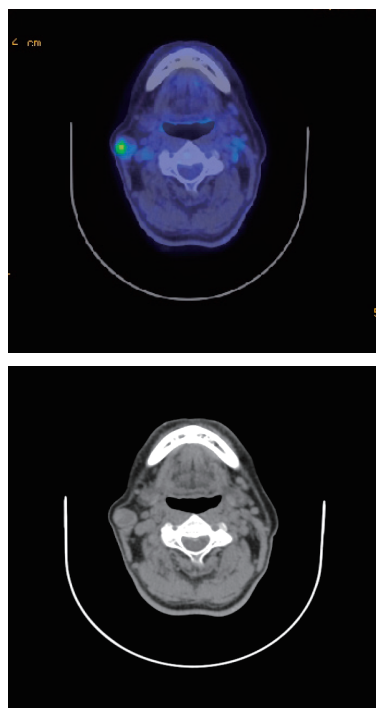


図1 PET-CT: 右頸部に集積，腫瘤を認める

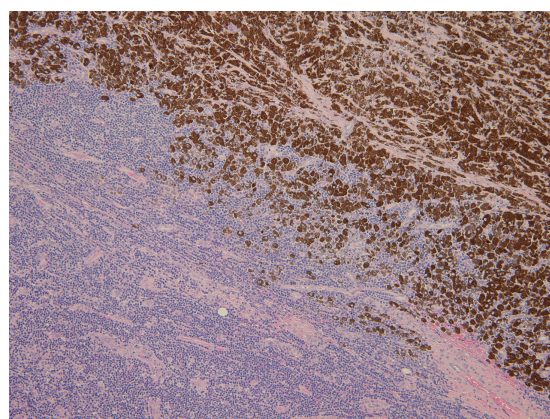


図2 右頸部リンパ節 HE 標本

【尿検査結果】

提出された尿は肉眼的に黒色を呈していた（図3）。尿 pH：7.0，尿比重：1.019，尿ブドウ糖：（－），尿ケトン体：（2+），尿ビリルビン：（－），尿ウロビリノーゲン：（－），尿潜血：（3+），尿蛋白：100mg/dl，尿亜硝酸塩：（+），尿白血球：（+）

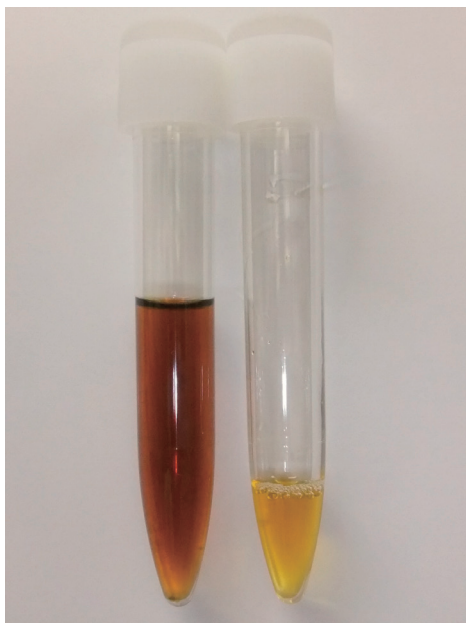


図3 尿肉眼像：左患者尿，右対象尿

【尿沈渣の細胞学的所見】

細胞質に黒色顆粒を有する異型細胞が散見された。核の観察が可能な異型細胞は小型から中型で核小体の腫大した核を有しており，一部に上皮様の結合がみられた。また紡錘形で黒色顆粒を有する異型細胞もみられた（図4）。全体的に細胞異型は軽度であるが，黒色顆粒を有する異型細胞，黒色尿，臨床経過等より悪性黒色腫由来の異型細胞と推定した。

【尿細胞診所見】

核小体が腫大し，核形不整の核を有する異型細胞がみられた。紡錘形で黒色顆粒を有する異型細胞の集塊も認められた。免疫細胞化学では melanosome（HMB-45）が陽性に染まり，悪性黒色腫の可能性が否定できないと診断された。

【考察】

悪性黒色腫はメラノサイトが悪性化して発症する。母斑細胞母斑（Clark 母斑や巨大先天性色素性母斑），青色母斑，色素性乾皮症などから生じる場合がある。外傷，紫外線，靴擦れや掻破などの物理的刺激，鶏眼切除，凍瘡，熱傷瘢痕なども誘因となる。悪性黒色腫は皮膚のみならず，眼窩内や口腔，鼻粘膜など他のメラノサイトの存在する臓器にも発生する。発生頻度および発生部位は，人種や居住地などによって大きく変化し，紫外線の影響が示唆される。紫外線防御能の低い（＝メラニンが少ない）白人に高頻度に発生し，露光部位に生じやすい。一方，紫外線防御能の高い黒人では発症は稀で，生じたとしても多くは四肢末端部である。黄色人種である日本人は両者の中間の傾向を示す¹⁾。悪性黒色腫はメラノサイトを起源とする悪性腫瘍であり，メラノサイトの存在しない尿路に発生することは稀である²⁾。

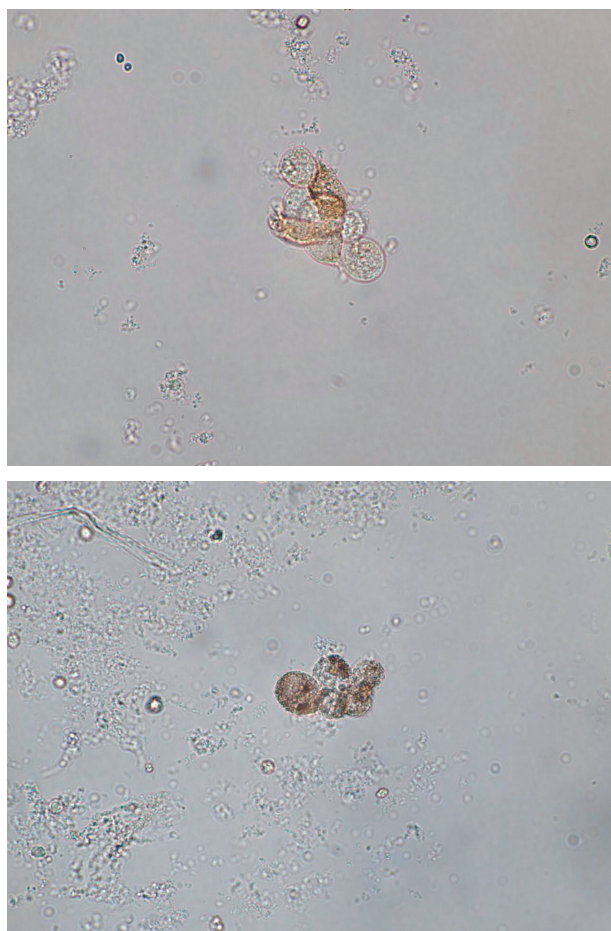


図4 尿沈渣：黒色顆粒を有する異型細胞

表1 悪性黒色腫転移部位³⁾

有転移症例(82例)		剖検による転移例(28例)	
肺	73例 (89.0%)	肺	25例 (89.3%)
皮膚・皮下	51例 (62.2%)	肝	21例 (75.0%)
肝	45例 (54.9%)	皮膚・皮下	15例 (53.6%)
脳	45例 (54.9%)	脳	15例 (53.6%)
骨	12例 (14.6%)	骨	5例 (17.9%)
膀胱	2例 (2.4%)	膀胱	0例

本症例は悪性黒色腫の既往やリンパ節転移があったため、尿沈渣に出現した異型細胞は悪性黒色腫の尿路への転移と判断された。悪性黒色腫は前述のとおり人種や地域により発生部位や発生頻度が異なるため、転移については日本のデータを示す。石原らの報告では転移のある悪性黒色腫 82 例のうち膀胱転移例は 2.4%、剖検を施行した悪性黒色腫のうち膀胱に転移していたのは 0%と報告している(表1)³⁾。

本症例は緩和系医療施設に転院したため最終的に尿路のどこに転移したかは不明であるが、黒色尿を呈していたことより下部尿路が推定される。本症例の尿沈渣の異型細胞は豊富なメラニン顆粒を有し、悪性黒色腫を推定することは比較的容易であった。悪性黒色腫は、本邦では尿路に遠隔転移を引き起こすことは稀であると考えられ、尿細胞診で異型細胞を認めることは予測困難であると思われる。そのため本症例で認められた黒色尿は悪性黒色腫を推定する上で重要な情報であると考えられた。

【結語】

本邦では比較的稀であると考えられる、黒色尿を呈した悪性黒色腫の尿路への転移を経験した。黒色尿、黒色顆粒を有する異型細胞の存在は診断に極めて有用であった。

参考文献

- 1) 清水宏：新しい皮膚科学，第3版，中山書店，2018，458-459
- 2) Pacella M, Gallo F, Gastaldi C, et al: Primary malignant melanoma of the bladder. Int J Urol 13:635-637, 2006
- 3) 石原和之・他：悪性黒色腫（1987～91年）の統計調査による疫学，予後因子，10年生存。Skin cancer. 15: 99-107, 2000

